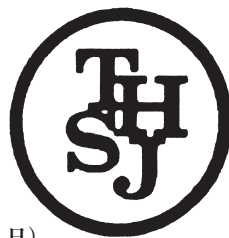


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第82号 (2017年9月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会
編集者 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号 名古屋学院大学 西村 美保



Loughborough の Queen's Park

(提供: 西村 美保)

ハーディの面白さ—その豊かさと奥深さ—

宮崎 隆 義

ハーディの世界に入り込んで、気ままにその世界を味わっているうちに、いつの間にか大学での教員生活もあと2年半ばかりと、そろそろお別れの時期が来ようとしています。今の大学は何が何でも改革を加速しなければならず、どこもかしこも悲鳴を上げているような状況ですが、グローバル化教育を進めろということで、いろんな試みを講じ学生を海外に送り出すことに必死で、そういう関連の予算は割と楽に獲得できそうです。もっともその後のことを考えればまるで白い象そのものです。学生たちの意識も大きく変わり、留学経験もあり発音も見事で、物怖じせず頼もしくすら思われるのですが、いざ講読の授業で、思い切ってハーディの短編などを扱ってみると、ほぼみんなモアイ像になって宙を眺めたり、突っ伏したりしています。文章を読ませてみると確かに発音は素晴らしいのだけれども、想像と理解がどうもうまく伴わないのか、ハイウ

エイやドライバーがどうのこうのと、いつの間にかあれれとアメリカの今の世界になっていることもありました。

人文学が軽視され、文学研究の基礎も危うくなっています。イギリスの過去の小説家や詩人の文章を丹念に読み理解して対話するという、極めて高度なグローバル化教育が損なわれつつあるように思えるのは、気のせいでしょうか。小説を読めば、自分の生き方を考える人間力も養えるだけでなく、人間関係でのコミュニケーション能力も養えるだろうし、コンテクストを理解すれば、対話力も人間の心理の機微も理解できると思うのに、パワーポイントのスライドやプレゼンテーションのやり方ばかりに関心が向いてしまっていて、ついTED Talkのパロディを見せたりしてささやかに皮肉を交えてユーモラスに楽しんでいます。

ユーモラスといえば、ハーディの文章に秘められたユーモアに最近大きな関心を向けています。短編などには、どたばたの喜劇のような作品もあったりして、ハーディという人はいったいどういう人だったのだろうか、ふと心配になったりもします。作品が秘めているテーマも極めて新しいものであることに、ハーディという人の先進性を今更のように述べるのは気が引けますが、たとえば今、私などよりも年配の社会人の人たちと講座で「萎びた腕」を読んでいて、何度となく読んでいるはずなのに、その凄さに改めて驚かされています。教育のある理性的で聡明な女性が腕の病ゆえにだんだんと迷信に捕らわれていく様子と、その背後に透けて見える夫との関係を取り戻そうとする女心の切なさが見事に描かれています。迷信に囚われ、手に入れてずらりと並べた偽薬や護符や薬草などに‘the multitudinous array’という言葉が使われていますが、あのマクベスのセリフを連想するとそれこそ大きな果てしないイメージの広がりを感じます。病気が治るために、誰かが早く絞首刑になってくれればと密かに祈ってしまうガートルードの心の弱さとそうやってゆくおぞましさ、現在でも起こっているかもしれない臓器移植に絡む人たちの気持ちなど、心の深い闇に踏み込むようでハーディの作品としての凄みを感じます。ですが、こういう作品にも、何とも言えないおかしみが込められているようです。

ローダが12歳の息子に、父親のロッジが連れて帰った新しい（というのも引っ掛かりますが）若い花嫁を見ておいでと命じると、息子は、言われた通りにまじまじと見つめるばかりか、母親に「生きた人形みたいにきれいだった、ものすごくきれいで完全に貴婦人そのまま」と、素直に母親の気持ちも考えずに（いやわかっているのか）伝えます。そのやりとりは、考えてみれば残酷なほどにユーモラスで、ローダの気持ちを逆撫でして歯噛みするほどに軋ませます。ガートルードとローダが魔術師のトレンドルのもとに行き、秘密を暗示されることになりましたが、考えてみれば、狭い村のこと、ローダとロッジの過去を知らないのはよそ者のガートルードのみで、誰がどこに何をしに行っただのかもすぐみんなに知れ渡るのですから、手の込んだ卵の占いも、滑稽なほどにインチキ臭いことがわかるでしょう。

イギリスのユーモアの伝統を考えると、ハーディも例外ではないのでしょうか。悲劇的な様相を冷徹なほどに描きながらも、そこはかたないユーモアを込めている、これがハーディの作品を豊かな奥深いものにしてしているのかもしれない。読めば読むほどに、巧妙に秘かに込められたユーモア性が、ハーディ独特の言葉遣い、言葉の選択に感じられます。それがまた悲劇性を高めています。ユーモアを込めるということには、極めて高度で繊細な言語感覚が必要なことは言うまでもありませんが、読まされる私たち読者も、その言語感覚に全力で対峙することになります。ユーモアは送り手と受け手との絶妙な知的交感作業の上に成り立ちますから、ユーモアが理解できないとなるとなんだか悲しくなります。

今の大学は研究機関なのか教育機関なのかわかりにくくなっていますが、個性あふれる大学という大義で否応なく峻別されていき、大学というおおよそ非営利の団体に競争原理や経営原理が導入されて、しきりに目標と計画が求められ、さらにそのエビデンスを示すために毎日何らかの会

議と書類作成の事務作業に追われています。教育に短期的な数値目標、エビデンス（ディケンズ風と言えばファクトでしょうか）をとといういささかユーモラスで強引な求めに、ぼやきながらもせっせと対応せざるを得ませんが、ハーディの作品を味わうことによってその豊かさ奥深さをユーモア性とともに知るということは、ユーモアは対象を突き放して客観視することが根底にありますから、非グローバル化しかけている世界の諸相を眺める上でも、大切な視点を持つに至るでしょう。そうしてそれがまた極めてグローバルな視野につながるというのもなんだか皮肉で愉快な感じがいたします。ですが、それが文学を味わうこと、文学を研究することなのかもしれません。

私のハーディ

仲田真一

“ハーディと私”という見出しの原稿を依頼されたにもかかわらず、敢えて「私のハーディ」としたのは理由がある。「私だけのハーディ」としようとも思ったが少し身勝手な印象になりそうなので結局上のような見出しになってしまった。私はハーディの専門家でもなければ、研究者でもない。鳥取大学の医学部で昨年まで医療英語を担当していた。本来あまり文学とは関係のない分野に身を置いていたが、ふとしたことからHardyに出会うことになった。そもそもハーディとの出会いは偶然であった。

ちょうどDr. Reishauwerが駐日大使として来日された時に、私はアメリカ大使館に勤務していた。ある時上司の西山千氏に頼まれてある英文雑誌の編集に携わることになった。勤務は4時15分で終了していて時間的な余裕が十分にあり、翌日の勤務にも差し障りがなかったので、引き受けることにした。良さそうな記事を選び編集に回すというものであったが、その雑誌の表紙の解説も私が担当することになった。その解説の校正にあたってくれたのが、一人の英国婦人であった。この方は当時の東京新宿区にある英国文化振興会の代表Sir Tomlin氏の秘書をつとめていて文筆の達者な方でMrs. C. Hollieといった。この方との親交が後の私の人生に大きく影響を与えることになった。私が最初にハーディの作品に触れることができたのもこの方を通してのことである。

ある日仕事が終わって二人で食事をしていた時のこと、是非読んでみては、と一冊の薄い原書を手渡された。それがHardyの“To Please His Wife”であった。早速帰宅して読み始めると、時間を忘れて夕食も取らず夜明けまで三度も読み返してしまったことがある。これがそもそもHardyとの最初の出会いであった。

それから十年余り後、British Council studentとして渡英し、イギリス教育について研修することになった。プログラムが終了し、暇をもてあましていた矢先、パイロン研究家の上杉文世氏からHardy Festivalのことを聞いたのである。氏とは研修でご一緒させて頂いていたので屢々下宿に招いて頂いて手料理などご馳走になっていた。そのときHardyのことを詳しく聞くことになったのである。私は急遽Dorchesterへ行ってみることにした。初めての汽車旅だった。Waterloo StationからDorchesterまでの車窓からの眺めは今でも忘れられない。これが切っ掛けとなって20数回Dorchesterに足を運ぶことになろうとは夢にも思わなかった。

まず、County Libraryに行って必要な情報を得ることにした。その時親身になってお世話頂いたのが、英国Hardy Societyの初代会長でありCounty Librarian（図書館長）のMr. Kenneth

Carterであった。これが縁となって後ごろ、ご自宅に逗留させて頂くことになり、氏のお亡くなりになるまで長い間の交流が続いた。氏との思い出は尽きない。中でも氏を通してHardy Cottageの住人であり、管理人であったSkilling夫妻に紹介され、Hardyの寝室で一夜を明かした日のことは生涯忘れられない。これもカーター氏のお陰であったことは言うまでもない。私はCottageを頻繁に訪れるようになって、Rainbarrow, Rushy Pondと近辺を隈なく歩き回った。当時Cottageのすぐ近くにMellstockという小さな茶屋があり、一休みしたことがある。しばしば立ち寄っているうちにその女店主と知り合いになり、彼女からHardyに関する珍しい話が聞けたのも幸運であった。中でも忘れられないのは、彼女から思いがけずHardyの書簡を見せて頂いたことだ。「あなたは日本人と見受けませんが、Hardy scholarではなさそうなのでお見せしてもいい」という。その理由を訊くと、「日本のscholarsにお見せするとよく『譲り受けたい』と請われるから」と返事が返ってきて苦笑してしまった。それはHardyのまぎれもない直筆の手紙であった。

また或時は少しでも“Egdon Heath”に残る太古の音に触れてみようかと夜更けに歩いてみたこともある。原始林の木立に分け入ると、長い年月のうちに堆積した木の葉がふわふわになっていて歩くのもおぼつかないくらい地面が柔らかであった。その原始林も80年代になって徐々に伐採の憂き目をみ、原始林がどんどん消えつつあった。開発が進み、Egdonの面影が消滅しつつあるのは残念なことだ。当時は小径を歩いていると子鹿に出会うこともあった。イギリスにしてもやはり時代の波には抗しきれないものがあるのだろうか。世界は確かに変貌しつつある。Egdonへのノスタルジアが湧くのはあながち私だけではないと思う。その後、72年に教育長のMr. Toogoodのお世話でDorchesterにあるMaud Road Primary Schoolで短い期間教えることになった。そこでHardyの縁者の方に3人もお目に掛かることもでき貴重な時を過ごさせて頂いた。いつの間にか私は自分の研究も兼ね、英国Hardy学会の時期に合わせてDorchesterに滞在するようになった。初めて英国を訪れた1968年に第一回国際Hardy学会（正確にはHardy Festival）が開催されてから、今日まで殆どこの学会に出席するようになった。私のような部外者でも出席できる、肩の凝らない自由な学会の雰囲気が好きであった。当時70年代はWeymouthにあるWeymouth College of Educationが学会出席者のために会場と宿泊を提供して私たちの便宜を図ってくれていた。学生の夏休み中を利用してその学生寮を提供してくれたわけである。学会は、Tessの舞台俳優でAlecの役を演じたTom Atkins氏のユーモアと機智に満ちた挨拶で始まったものだ。氏は生前のHardyを知る数少ない人の一人であった。温厚なお人柄で日本には大変興味があり私のような若輩にも気さくに話し相手をして頂いた。夜には、そのままブローチにでもなるような艶のある小石の続くChesil Beachで、波の音を耳元で聞きながら詩の朗読に聴き入ったことも忘れられない。ここを訪れる度にその石を集めて持ち帰り、今ではその石が花のかわりにわが家のテーブルの水盤に収めてある。水を湛えた水盤の中で濡れた小石はいっそう美しさを増して目を楽しませてくれている。時に知人が来ると、お土産の一つ差し上げることにしている。

Rainbarrowへつづく小径の両脇には釣鐘型をした可憐な赤紫の、小さな花をつけるheatherが息を潜めるように咲いている。棘のある黄色い花のfurze (gorse) がその中に点在する。furzeは一年を通して咲いているという。*The Return of the Native*の中によく出てくる。自動車からDorchesterからLondonに向かう途中、特にMoreton / Wool間、Bournemouth / Brockenhurst / Totton間などには広大なheatherの原野が続いていて見とれてしまう。

A sprig of heather growing
So unobtrusive

And secret:
It has grown and bloomed
Unnoticed,
Surrounded by gorse.

Rainbarrowへ向かう途中の道端で、群れを離れて花をつけていた一枝のheatherを見つけて手帳に書き留めた。これは私だけの記憶として今も大切に残している。

Hardy が、今に私に残してくれたものは、作品の登場人物たちがどうにもならない、与えられた生を精いっぱい生き、その証として示してくれたアガペーとフィリアの愛のかたちである。かなしみとなぐさめに満ちた生の証として。

ハーディと私 その後

渡 千鶴子

現在、研究発表の応募や『日本ハーディ協会ニュース』『ハーディ研究』の原稿は、電子データでの提出が主流である。事務局からの案内、会員の著書・翻訳書の紹介、ハーディ関連の諸学術・学会活動の情報などは、メーリングリストを活用している。海外情報は、ホームページから簡単にキャッチできる。例えば、ハーディがデザインした祭壇飾りが発見された（All Saints Church in Winsor）というBBCの記事（1分37秒の視聴付き）がアップされている。1957年の創設時と比較すると、隔世の感があり、当時費やされたであろう労力や時間は計り知れない。創設者故大澤衛先生のご尽力は、諸先生方から仄聞しているし、ドーチェスターの図書館には大澤衛著の書籍が所収されていることから容易に拝察できる。だからこそ、今でも出版社から故大澤先生について問い合わせがあるのだろう。

協会に所属している年数だけは長く、発表や執筆はしても、学会の運営に関しては無関心で、声かけをして頂いても消極的であった。学会からハーディに関する知識や情報は頂戴しても、自らは動かず能天気であった。しかしハーディ全集の『詩集Ⅰ』の編集に関わったのを機に、運営に携わることになる。『日本ハーディ協会ニュース』の編集作業を通じて編集の難しさを学び、「ハーディと私 その後」を思いつくきっかけを頂いた。また名簿の担当を通じて多くの会員を知ることになり、ポスター作成のための知識も増え、街角や列車の中のポスターに視線がいく自分に気づいて苦笑する。

運営の一環として、草創期から現在に至るまでの歴代の役割分担を調べていて、後進の育成や海外との交流など協会の発展と充実に精励なされた先輩諸氏を垣間見た。そして時代の推移と共に、実務を行う役員の名称や人員数に変化があることを知った。近年は、少子化の波による大学変革、中教審の「大学教育の質的転換」の提言による教育課程編成が夥しい。これまで順風満帆であった当協会に凋落の影があるわけではない。しかし純粋な好奇心から生まれる研究だけではなく、社会のニーズを踏まえた研究も志向せざるを得ない潮流も感じる。今後の研究は両輪を視野に入れ、バランスを取ることが求められているように思える。

さて、日本ハーディ協会ほどの歴史はないが、英国のThe Thomas Hardy Society が、2年に1度開催している Conferenceに、私は数回参加している。2000年に、ホストファミリーからThe Coach House, Llanherne (Thomas Hardy's home 1881-1883, Wimborne) の冊子を渡された。

LlanherneはMax Gateに居を構える前の仮住まいで、ハーディはここでの生活に期待していなかったようだ。しかし、‘In working out this problem, human nature must never be made abnormal, which is introducing incredibility. The uncommonness must be in the events, not in the characters; and the writer’s art lies in shaping that uncommonness while disguising its unlikelihood, if it be unlikely.’ や、‘As, in looking at a carpet, by following one colour a certain pattern is suggested, by following another colour, another; so in life the seer should watch that pattern among general things which his idiosyncrasy moves him to observe and describe that alone.’ といったよく引用される小説観は、Llanherneで生まれている。‘a woman’s not becoming necessarily the chattel and slave of her seducer’ という考えに感銘を受けたのもLlanherneであり、これが多くの登場人物に使われているのは周知の通りである。ハーディは、Llanherneで、シェイクスピアの朗読会に呼ばれ、しばしば友人たちの訪問を受け、隣人である上級弁護士のティンダル＝アトキンソンとも親しくなっている。もしかしたら彼は、‘On the Western Circuit’ の構想と何らかの関係があるのかもしれない。また苦勞の末 *A Laodicean* を完成して刊行、続いて*Two on a Tower* も刊行して、‘The Romantic Adventures of a Milkmaid’ を*Graphic*に送付している。以上のことから、Llanherneでの生活は、ハーディの予想に反して充実していたといってもいいだろう。

Llanherne から移り住んだMax Gateの近隣にはSt. George's Churchがある。2002年、私はこの教会の結婚式に参列する機会を得た。真夏の午後2時にトランペットがコンチェルトを奏でたあと、赤と白の正装に身を包んだ会衆たちが聖歌隊として賛美歌をうたった時、思わず*Under the Greenwood Tree or the Mellstock Quire* を想起した。1時間程度の式が終わり、鳴り響く鐘の音に耳を傾けていたら、belfryに誘われた。非常階段のようなとても細い階段を何段も昇ると、高い天井の小部屋があり、その中にラフな装いのbell-ringerが6人いた。bell-mouthの中にはclapperがあり、clapperには6本のbell ropeが取り付けられていた。それを6人の男性たちが交互に引くと、鐘が高らかに鳴る仕組みになっていた。教会堂内が表舞台であるなら、教会堂外に属するbelfryは裏舞台そのもので、薄暗くて、木片、油、汗の入り混じった殺風景な様相を呈していた。しかし表舞台を支えている矜持に満ちていて厳肅さを感じた。表の世界のロマンチックな雰囲気とは違い力強いリアリティーもあった。境内に降りてきてbelfryを見上げて、あの空間から紛れもなく澄んだ美しい音色が響き渡るのだと感慨に耽った午後だった。

Darwinianとしてのハーディとファウルズ —「共感」をめぐって—

福原俊平

「ハーディと私」を書かせてもらったのは、大学院生時代のことなので、かれこれ十数年前になるだろう。数回の引越越しを経て、その時の「協会ニュース」はどこかに行ってしまったが、私の記憶では、ハーディ研究を志した理由を書いたはずだ。学部時代の卒業論文はJohn Fowlesの*The French Lieutenant’s Woman*で書いたのだが、ご存知の通りファウルズはハーディから大きな影響を受けた作家である。「ハーディと私」では、ファウルズを経由してハーディを研究するに至った経緯を語ったはずである。その後、ファウルズからは遠ざかっていたが、近年ふと思い立って久しぶりに読み返し、現在はファウルズ論を執筆中である。このようなタイミングで、本エッセイを書かせていただくことに、奇妙な縁のようなものを感じる。

ファウルズはハーディを郷土の大先輩として敬愛していたが、10数年前の私に関心を持った二人の共通点は、集団ではなく個を重視する姿勢だった。社会の硬直した価値観の中でもがき苦しむ個人を描き出したハーディからは、実存主義的な苦悩を描いたファウルズに近い問題意識が見られ、そのような関心が私のハーディ研究の出発点となった。

ハーディ研究を進めるにつれ、大きな意味を持つようになったもう一つの共通点は、両者とも Darwinian であるということだ。 *The French Lieutenant's Woman* はヴィクトリア朝時代を舞台に、ダーウィンを信奉するアマチュア古生物学者を主人公としており、断層で化石を発見する場面など、 *A Pair of Blue Eyes* とのインターテキストの要素も見られる。ハーディがダーウィンの影響を受けたことはよく知られており、一般的には決定論と自由意志の問題として理解されることが多いだろう。遺伝とは人間には抗いようがない大きな力であり、一種のペシミズムの源となる。

「ハーディと私」の頃は、私も上述の認識しかなかったが、その後の研究を経て強く感じるのは、ダーウィンの影響の幅広さだ。ダーウィンの影響をより広く理解するべく、私は「動物との共感」（『ハーディ研究』第38号）と「利他的な失敗者」（『ハーディ研究』第40号）において、動物愛護思想や道徳論へのダーウィンの影響を踏まえ、ハーディ小説を論じた。実は、進化論は動物愛護思想にも影響がある。伝統的な分類学においては、人間と他の動物は別個の存在であったが、進化論は種と種の間を垣根を低くし、人間と動物は進化という鎖によってつながった仲間だという認識をもたらした。

私が共感というテーマに注目した背景には、論文内ではあまり言及しなかったが、実は認知科学への関心がある。「共感」は認知科学的な文学研究におけるキーワードである。ヒトという生物にとっての文学あるいは物語の意義・役割としては、心の理論 (theory of mind) の発達が挙げられる。心の理論とは、他者の心情や意図を推測する心の機能である。Lisa Zunshine の *Why We Read Fiction* が代表的な議論になるが、様々な状況で他者の心がどのように動くのかを理解するため、人間は子供のころから物語を通して練習しているという説がある。共感という心の機能が注目を集める一因には、近年のミラー・ニューロンの発見もあるが、歴史的に遡るとダーウィンの *The Descent of Man* が重要な出発点の一つである。ダーウィンによると、共感能力は自然選択という進化のプロセスによって人間が獲得した能力であり、利他的な行為や自己犠牲など、一見したところ生存競争に不利に働くように思える道徳的な特徴を進化論の枠組みにおさめた。そのような点を意識しながら、ハーディ小説における動物との共感の場面や利他主義的な振る舞いに注目し、前述の論文を書いた次第である。

さて、昨今は認知科学的な文学研究も続々と出版されているが、そのような研究に対する警戒感もまだ根強いように感じられる。我々ヴィクトリア朝文学研究者は、ダーウィンの重要性だけではなく、ダーウィンが悪用され、科学の衣服を着た人種差別、性差別が横行した時代をよく知っている。そして、それが最終的にはホロコーストにつながったことを考えれば、認知科学を新しい生物学的決定論として警戒するのも無理はないのかもしれない。しかし、新しい知見から得られるものは、活用するべきであろう。私が特に強い関心をもつのは、Zunshine が “cognitive cultural studies” と呼ぶアプローチである。生物はそれが生きる「環境」から切り離すことができない。そして、ヒトにとっての環境は「社会」であり「文化」であり、それらは「歴史」によって構築される。人間が生物として hardwire された部分と、その生存環境である社会という人工構築物との関係性に、私はいま最も興味を持っている。

それが、私がファウルズに再び関心を持った理由でもある。ファウルズは、「現実」を人工構築物としてとらえるポストモダニストであると同時に、ダーウィン主義者でもある。ハーディも社会の因習と人間の動物性という問題に悩んだ作家である。もう一度ファウルズに取り組むことを通して、ハーディ理解も広げることができればと考えている。

《シンポジウム予告》

Thomas Hardy と同時代文学

イントロダクション

並木幸充

ハーディという作家は、Victorianism の風土の中から、晩年は Modernism の風土の中で創作活動を行ってきたが、それぞれ同時代の作家作品の文脈の中で見た場合、長編小説、短編小説、詩、劇すべてにおいて、程度の差はあれ、微妙に時代を浮き出たような側面があるように思う。19世紀から20世紀にかけての二つの大きな文学の潮流を現役作家として経験している希有な存在でもある。個別の問題に関してはこれまで詳細に議論されてきたが、ここでもう一度原点に戻って、同時代の文学傾向を意識しながら、ハーディの特質を改めて議論し直してみることも無意味ではないであろう。従って、今回のシンポジウムの目的は、各講師の先生方に、上記のテーマのもとで自身の観点からそれぞれ問題を提起していただき、思い切って率直に意見交換をすることを旨とし、それによって少しでもハーディという作家の独特な魅力に迫っていけることを願っている。

Thomas Hardyと1910年代

並木幸充

20世紀のハーディは詩が主な活動になっていたが、その作風はVictorian とは言いにくいし、EdwardianやGeorgianの詩人たちと同一視するのも抵抗がある。もちろん、Symbolismやモダニズムの点からハーディを捉えることにもかなり躊躇せざるを得ない。そこで今回考察の対象としたいのは、19世紀文学と20世紀文学という二つの潮流の転換期、移行期の要にあたる1910年代に焦点を当てて、その時期の作品をもとにハーディの特徴を具体的に考察してみることである。もしこの時代のハーディが、かなり特異な存在感を持っていたとすれば、それはどのような点であり、そしてそれは他の作家と比べてどの程度独特なものだったのか。この目的を多少とも達成するために、同時代文学に対するハーディ自身の見解を概観し、次に同時代作家によるハーディ評を踏まえた上で、具体的な作品、特に1910年代に刊行された二つのハーディの詩集、*Satires of Circumstance* と *Moments of Vision* を中心に取り上げ、しかも議論を絞り込むため、基本的に抒情詩を中心に扱って、その個性的特質の有無などを考察してみたいと思う。

押本年真

Hardyの第五詩集 *Moments of Vision and Miscellaneous Verses* に収められた主に第一次大戦を扱った 'Poems of War and Patriotism' を中心に取り上げ、それらの詩に表れている反戦意識を明らかにしたい。同時にこれらの詩を *The Dynasts* 中のいくつかの戦闘場面や第二詩集 *Poems of the Past and the Present* に収められたポーア（南ア）戦争を扱った詩との比較を試みたい。また、これらの戦争詩はHardyの他の詩とどのような関係にあるのかを若干でも明らかにしたい。

最後に老成した作家・詩人として銃後で大戦についての詩を書いたHardyと、実際に従軍し塹壕での戦いも経験した Edward Thomas, Wilfred Owen, Siegfried Sassoon 等と比較し、世代と戦争経験の質では大きな違いがあるものの、両者に共通する反戦意識を明らかにし、そこに反拡張主義、反大英帝國的なイングランド観があるのではないかと、若い世代の詩人達はHardyから何

を継承したかにふれることになろう。

準備と当日の時間に余裕があれば、*E. M. Forster*の*Howards End* (1910) , *Virginia Woolf*の*Jacob's Room* (1922) , *Mrs. Dalloway* (1925) , *To the Lighthouse* (1927) に言及するかもしれない。

モダニズム文学とThomas Hardy

中 谷 久 一

モダニズム文学的視座から、Hardyを眺める。

(1) モダニズム文学には、ヴィクトリア朝文学という「偉大な父」に対する反抗という側面がある。この点から見た場合、Hardyは英国文学の流れでどのような位置を占めるのか。(2) モダニズム文学、とりわけT. S. Eliotの詩などは、19世紀末フランス象徴派の影響を受けており、20世紀初頭におけるその再来とも言える。フランス象徴派の詩は音楽を目指した。James Joyceは歌手になりたかった。また、Virginia Woolfは*The Waves*を執筆する際にベートーヴェンを聴き、作品を詩に近づけようとした。そして、Hardy。彼は晩年詩作に移行する。(3) Hardyの思想について言われる、有名な“immanent will”。20世紀に入ると、フロイトの「無意識」やマイケル・ポランニーの「暗黙知」という、意識が制御できない何かへの注目が始まる。“immanent will”という発想は、20世紀的知への先駆けであろうか。

上記の点を中心に考察したい。

ハーディ小説の魅力

塩 谷 清 人

誤解を恐れずに言えば、ハーディの小説は極めて実験的、かつ挑発的である。既成の小説やセンセーションノヴェルなど大衆的な小説の影響を受けながら、そこから絶えず逸脱していく。レズリー・スティーヴンなどの検閲はそれに対する規制である。階級意識に縛られ中産階級中心だった小説の対象は、農民など労働者階級にまで広げられている。貧富の問題が示される。読者は既成の小説と違って多様な声を聴き、多様な考えを知る。さらに描かれている自然はそれまでの小説のように人間が客観的に観察する対象でなく、そこに住まう人間を巻き込む。ハーディ小説は時代を写す社会史であると同時に人類史、自然史でもある。その歴史は繰り返され、変奏される。詩人であるハーディの時間感覚は自在である。

一言で言えば、さまざまな要素の融合、統合、syncretic な世界をハーディ小説に見る。それは独自の小説世界で、あえて現代的という必要はない。さらに言えば、小説とは何かを示してくれてもいる。

《特別講演予告》

ハーディにおけるリアリズム小説とその逸脱

— 『ラッパ隊長』を中心に—

玉 井 暲

トマス・ハーディの小説は、リアリズム小説でありながら、「偶然の一致」と称される展開がプロットの欠点として指摘されることがある。現実社会の慣習・常識や一般の人々の生活を支え

ている論理・法則に則ってその世界のrealなありようを描出することを求めながら、登場人物は時に予想もできないような運命に挑戦させられたり、あまりにも出来過ぎた物語展開への飛躍が見られたりして、読者が戸惑うことも少なくない。こうしたリアリズム小説の枠組から逸脱した物語展開が窺え、それが許された文学ジャンルがあるとなれば、それはRomance やFantasy だと言えよう。だとすれば、ハーディの小説は、リアリズム小説のコンヴェンションを保持しつつ、その枠からの逸脱という問題を根底に抱えていた小説と言えるのではあるまいか。

もっとも、ヴィクトリア朝のリアリズム小説家は、誰も、このリアリズム小説のアポリアともいべき問題を抱えていた。ハーディが自伝『トマス・ハーディの生涯』のなかでいみじくも告白しているように、‘real’、‘common’、‘ordinary’なるものの‘transcript’を執拗に求めていけば、物語空間に面白さ（‘interest’）を創出できなくなるからである。批評家Caroline Levineによると、ヴィクトリア朝小説には、単調や退屈を避け、興奮を作るために、結婚のプロット、探偵小説的ミステリー性、センセーショナルな出来事、センチメンタルな恋愛、物語の要としての偶然の一致などの展開がよく見られるという（‘Victorian Realism,’ *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*, 2013）。

今回、「ハーディにおけるリアリズム小説とその逸脱」という問題について考えることを通してハーディ小説の特質に迫ってみたい。『ラッパ隊長』における歴史小説とその逸脱のありようを検証し、『カースタブリッジの町長』と『テス』におけるリアリズム小説と叙事詩的小説との二重性の問題にも触れ、ハーディ小説におけるファンタジー小説『恋の霊』に至る道を探ってみたい。

《内外ニュース》

会員による研究書：

大沢衛訳、トマス・ウルフ『天使よ故郷を見よ』上・下（講談社文芸文庫、2017年）

《ハーディに関する講演会》

2017年6月3日（土）に大宮駅西口カンファレンスセンター、ベルヴェ・オフィスにて開催された「日本ギヤスケル協会第29回例会」にて、鮎澤乗光氏（元東京女子大学教授）による「『ルース』の表層と深層——「更生」から「救い」へ——」と題する講演があった。

《編集後記》

表紙の写真はイングランド中部のLoughboroughのQueen’s Parkです。この公園には“Carillon Tower”という戦争記念博物館と昔は浴場だったこともある建物を使用した“Charnwood Museum”という博物館があります。前者は47の鐘があるベル・タワーで、それぞれの鐘に寄贈者の名前と戦死者達の名前が刻まれていて、世界大戦とその他の戦争関連の展示がなされています。後者は幅広いテーマを扱ってはいますが、特にテキスタイル関係の展示が興味深いです。現在もLeicesterを中心に中部はテキスタイル産業が盛んで、多くの移民が住んでいます。

さて、今回で編集者としての仕事が最後になりました。執筆者の皆様におかれましては、暑い中、素晴らしい原稿をお寄せいただきまして、誠に有難うございました。また、中央大学生協印刷係の藤様のご尽力に感謝します。いろいろと不備があり、ご迷惑をおかけしたこともあります。皆様のご協力に改めて感謝したいと思います。